

京仏壇・京仏具の社会的受容とその実態について

成 田 智恵子

[要旨] 本稿では、日本の仏壇の起源および昭和中期までの京仏壇・京仏具の歴史の変遷について先行研究をもとに系統的に整理した。また、近年の京仏壇・京仏具の社会的受容を探るために [①産地の特徴] [②受容の変化] [③意匠の変化] の3つの観点から、京仏壇・京仏具の製造販売者と職人を対象とした半構造化面接を行なった。

1. はじめに

京都は西陣織や京鹿の子絞、京石工芸品、京漆器、京人形などの種々の工芸が集約した日本最大規模の伝統工芸の産地である。京都が手仕事のものづくり都市として栄えてきた背景には、天皇や公家、武家、僧侶、町人などの都に集った多様な人々の生活文化がある。平安遷都以来、京都の手工業者たちは木や漆、絹、石、金属などの天然素材を活用して、様々な身分の人たちの生活文化に応じた道具を生み出し、人々の暮らしを豊かにしてきた。

これまでも美術史や産業史、材料科学などの多様な研究分野から京都の伝統工芸に対するアプローチがなされてきた[1-3]。しかし、京都の伝統工芸はその歴史の長さはもとより、規模の大きさや分業制などの複雑多岐に渡る構造が相俟って全体像を捉えることが難しく、分野によって研究の進度に差異がある。西陣織や京友禅、京仏壇などが大規模な分業制を敷く工芸として知られるが、その中でも京仏壇・京仏具の研究はほとんど進んでおらず、明文化されている資料も少ない。

広義の意味における仏壇とは仏像を安置するための壇を指し、仏具とは仏事に用いる器具を指す^(1,2)。仏壇・仏具は言わずもがな仏教と深い関りを持つ。特に各宗派の本山が集う京都においては仏壇・仏具製造が一大産業として発達してきた経緯がある。例えば図1に見られるように、東西両本願寺周辺には現在も多くの仏壇・仏具商が軒を並べている。京都の仏壇・仏具製造業者の多くは下京区を中心として産地を形成している[4]。また、昭和49年(1974)に山科区に仏具扇子団地が造成されたこともあり、以来木地制作や箔押などを担う数社が仏具扇子団地に工房を構えている。

京仏壇・京仏具の生産額は、平成元年(1989)をピークに減少傾向にある[5]。日本国内の宗教用具製造品の出荷額のピークは平成2年(1990)であり、京都以外の仏壇・仏具産地も軒並み同様の傾向を示している[5]。かつては多くの家に仏壇が安置されていたが、現在は仏壇を安置していない家も珍しくない。特に平成時代以降はライフスタイルや宗教観、死生観の変化などの複雑な社会的背景もあり、伝統的な仏壇の社会的受容も大幅に変化している。一方、近年の京仏壇・京仏具の社会的受容に関する先行研究は極めて少なく、不明な点も多い。

そこで、本稿では特に京仏壇・京仏具に着眼し、まず日本の仏壇の起源と京仏壇・京仏具の歴史の変遷を先行研究に基づいて系統的に整理する。その後、



図1 東西両本願寺周辺の風景

京仏壇・京仏具の製造販売者と職人に対するインタビュー調査の結果から、近年の京仏壇・京仏具の社会的受容について検討する。なお、京仏壇・京仏具は大別すると、ともに寺院用と在家用（家庭用）の二分野に分けられる。本稿は市井の人々の生活における仏壇の受容を研究対象とするため、特に在家用の仏壇・仏具の礎となる歴史的経緯に着眼して論を進める。

2. 日本の仏壇の起源と在家用仏壇の成立

仏壇という言葉の史料上の初見は『日本書紀』の天武天皇14年（685）3月27日の「諸國每家作佛舎、乃置佛像及經、以禮拜供養」の詔である⁽³⁾。本詔に示される「家」は今日の一般的な家とは異なるが、本詔を受けて豪族たちが持仏堂を設けるようになった。持仏堂とは個人が平時に信仰している仏像、すなわち持仏を安置しておく堂のことを指す。仏壇の起源については、持仏堂が収縮したものが庶民の仏壇の起源であるとする説[6]、お盆の時期に設けられた魂棚（盆棚）を仏壇の起源とする説[7]などの諸説が存在する。他にも、仏壇と位牌との関係性を指摘するものもあるが、仏壇の起源は特定のものではなく、種々の要素の関連によって生じたものとの見解も示されている[8]。

なお、仏壇の起源をめぐる諸説それぞれに対して、不明点や矛盾が指摘されている[8,9]。持仏堂を仏壇の起源とする場合は、一部の上層階級が所有していた持仏堂が具体的にどのような過程を経て庶民の信仰する仏壇に結び付いていくのかが明らかではない。また、盆棚を仏壇の起源とする場合は仏壇普及後も盆棚と仏壇が分化している理由が説明できない。そして、位牌を仏壇の起源とする場合は位牌信仰の成立時期との矛盾が生じる。位牌に関しては儒教の影響を受けたものと捉えるのか、あるいは依代に由来するものと捉えるのかによっても解釈が分かれる[10]。以上のように、仏壇の具体的な歴史的経緯については未だ明らかではない部分が多い。

仏壇の成立を考察する際に立ちはだかるのが、何を以て仏壇とするのかという定義上の問題である[9]。仏壇に関する考え方や呼称、種類は時代や宗派、

地域などによって異なる。また、仏壇を「仏を安置するための壇」として捉えるのか、あるいは「祖先の祭祀のための壇」として捉えるのか、さらには寺院用の仏壇なのか、在家用の仏壇なのかによっても、大きな差異が生じる。本稿が対象とする今日に見られるような在家用仏壇の形態の成立という点に着目するのであれば、その成立には江戸初期の幕府の宗教政策の関与が見られる。

江戸幕府は成立当初こそキリスト教に対する弾圧的な政策は進めていなかった。しかし、国内の宗教統制を進めていく過程で度々禁教令を發布するようになった。また、宗門改により家および個人の宗旨と檀那寺が明確化されたことにより、檀家には仏壇が安置されるようになった[11]。宗門改はキリシタン信仰への禁圧と戸籍制度の役割を果たすとともに在家用仏壇の社会的受容を生み出し、結果的に仏壇・仏具の需要の増大へと繋がった。地域や階級の違いによる普及の差はあるにしろ、十七世紀の農家や町家に仏壇が設けられていたことが各地の古民家の調査から明らかにされている[12]。

江戸幕府の宗教政策に伴う仏壇の普及とは別に、浄土真宗には独自の仏壇の歴史がある。浄土真宗の中興の祖とも言われる本願寺八世の蓮如上人は、諸国を巡って各地で聞法会を開き、仏壇を持つように説いたとされる[13]。また、浄土真宗は戦国時代に一向宗として武家統制に反抗し、寺院経営が困難に陥った時代に、信者が密かに屋内に祭壇を設けてお内仏として大事にしたとも言われている[14]。他にも、「家」に安置される工芸的な仏壇の成立以前から存在した「仏像や絵像の本尊を安置する仏壇」を浄土真宗の仏壇とする考え方も示されている[9]。

伝統的な仏壇は大別して金仏壇と唐木仏壇に分けられる。仏壇には八宗用と呼ばれる宗旨を問わずに使用できるものもあるが、浄土真宗においては本尊である阿弥陀仏の光明を表現するため、一般に金箔や種々の荘厳が施された金仏壇が用いられる。なお、浄土真宗以外の宗派でも金仏壇は用いられるが、宗派によって意匠に差異が見られる。唐木仏壇の場合は宗派ごとの差異は金

仏壇ほど顕著ではない。

令和5年(2023)10月時点で、国の伝統的工芸品⁽⁴⁾に指定されている仏壇の産地は十五産地ある。各産地が成立した時代を見ると、彦根仏壇(滋賀県)が寛永年間、名古屋仏壇(愛知県)や三河仏壇(愛知県)、飯山仏壇(長野県)などが元禄年間、山形仏壇(山形県)が享保年間、八女福島仏壇(福岡県)が文政年間とされる[15、16]。時期は明確ではないものの、三条仏壇(新潟県)や金沢仏壇(石川県)、広島仏壇(広島県)なども江戸時代に産地が形成されている。以上の産地形成の動向からも、各地で在家用仏壇が普及し始めた時代が推定される。

なお、国の伝統的工芸品の指定を最も早く受けた仏壇産地は彦根仏壇と川辺仏壇であり、昭和50年(1975)5月10日に指定を受けている。次いで飯山仏壇(同年9月4日)、京仏壇(昭和51年2月26日)、金沢仏壇(同年6月2日)、名古屋仏壇と三河仏壇(同年12月15日)と続く。また、仏具の産地として国の伝統的工芸品に指定されているのは京仏具(京都府)と尾張仏具(愛知県)の二産地のみである。京仏具は京仏壇と同時期の昭和51年2月26日に指定を受けている。一方、尾張仏具が指定を受けたのは平成29年(2017)1月26日であり、他の仏壇・仏具産地よりも比較的新しい⁽⁵⁾。

3. 京仏壇・京仏具の歴史的変遷

上述したように、京都では京仏壇と京仏具が国の伝統的工芸品としての指定を受けている。仏教伝来の歴史的経緯から、ここでは仏壇に先んじてまず仏具について述べる。日本における仏具の起源は、仏教伝来の際に仏像や経典とともに幡や蓋などの仏具がもたらされたことに始まる。後に寺工・画工・瓦博士・鍬盤博士などの技術者が渡来したことにより、国内でも技術者が育成された[17]。

京都における仏具制作の始まりは、最澄、空海の時代に遡ると推定されている。当時の京都では寺院の造営が進んでいたこともあり、付随的に仏具制

作の技術も発達した。特に真言密教の隆盛とその寺院造営においては、金仏具が大きな功績を果たしたとされる[18]。現在も京都市下京区に店を構える田中伊雅佛具店は仁和年間（885年頃）の創業であり、主に真言宗の密教法具を取り扱っている。田中伊雅佛具店は現存する京都の仏具商として最も長い歴史を有している。

七条仏所の存在も京仏具の歴史を論じる上で欠かすことができない。七条仏所とは仏師定朝が十一世紀初頭に設けた仏所である。今日の京仏具の制作・仏像彫刻の礎は定朝によって築かれたとされる[15]。七条仏所からは数々の優れた仏師も輩出されており、一般には運慶や湛慶、快慶などが良く知られている。七条仏所自体は後に焼失し、その遺構は完全に失われている。跡地とされる現在の七条高倉交差点付近には、七条仏所跡の立て看板が設置されている。

七条が仏具の制作地であったことは、平安時代後期頃の随筆『新猿楽記』の七条に関する記載部分に「花瓶」「閻伽器」「獨鋤」「錫杖」などの金属製仏具の名称が並んでいることから示唆される[19]。また、鎌倉時代前期の随筆『宇治拾遺物語』の巻二の四「金峯山薄打の事」は「今は昔、七条に薄打あり」の書き出しから始まり、七条の箔打ち職人や仏像への箔の使用に関する記載が見られる[20]。なお、京都には七条仏所の他にも三条、五条、七条大宮、六条万里小路などの各所に仏所があったとされている[21]。

平安時代末期以降に誕生した浄土宗・浄土真宗（一向宗）・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗（法華宗）・時宗などのいわゆる鎌倉仏教は、従来の仏教の捉え方や受容層に大きな変化を及ぼした。仏教がより多くの人々に浸透していく反面、かつての上層階級が持ち得ていた仏教思想への理解とは別に、仏の教えを平易に説く仏教が受容されていった。鎌倉仏教の存在は京都の宗教都市としての性格を強め、さらに宗派ごとの要求に応じるために多くの工人たちが京都に集った。また、仏所に所属する仏師たちは造仏に限らず、後の仏壇製造の礎となる蒔絵技術や鋳工芸の技術をも磨いていたとされる[22]。

戦国時代の内乱によって京都の市街地は荒廃したものの、豊臣政権と徳川政権の政策をもとに復興を遂げ、宗教都市としての性格をより強固なものとした。特に徳川政権下ではキリシタンへの弾圧政策が副次的に仏教保護を後押し、寺請制度・檀家制度の確立や仏教教団を通じた幕府の支配機構の構築へと繋がった[23]。結果として、日本各地で仏壇・仏具の産地が形成されたことは先に述べた通りである。さらに、幕藩体制下における地方藩の勸業保護政策も仏壇の産地形成を促進した[24]。京都においても寺院用仏具から在家用仏壇への移行が始まった[15]。

江戸期の京都の仏具商に関する史料としては、延享2年(1745)に刊行された『京羽二重大全』⁽⁶⁾に八軒の仏具師の名と住所が記載されている。また、天保期に刊行された『京都買物獨案内』⁽⁷⁾には、「佛具金物問屋 藤屋喜兵衛(寺町四条下ル)」、「佛具鑄物師 村上長兵衛(六條佛具屋町花屋町南入)」、「真言密教御佛具師 田中伊賀禄(佛具屋町五條上東側)」、「金佛壇所 八幡屋治助(西六條醒井北御門一丁上)」、「御佛具所 中屋儀兵衛(新町七条上ル)」などの多数の仏壇・仏具商や工人たちの名と住所が記載されている。江戸時代創業の京都の仏壇・仏具商で現代に続く企業としては、乾大仏堂、小堀、若林佛具製作所などが挙げられる。これらの史実からも京都において仏壇・仏具が長期に渡り広く求められてきたことが伺われる。

仏壇産業は景気変動の影響が比較的小さいこともあり、明治時代以降も全国的に成長を続けた。しかし、他業種からの仏壇産業への参入が進んだ結果、原材料調達の問題や粗製乱造、作業環境の劣位などが顕在化し、それらの諸問題を統制するための同業者組合が各産地で結成され始めた[24]。現在の京仏壇・京仏具の産地組合である「京都府仏具協同組合」は昭和22年(1947)に設立された「京都府宗教用具商工協同組合」を前身とする。京都府宗教用具商工協同組合設立以前にも、京都には「京都佛壇佛具商工組合」「京都佛壇佛具同盟會」「京都佛師商工會」などの現在の母体となる諸団体が存在していた[25]。

京仏壇の産地的動向としては、明治中期以降に在家用仏壇を名古屋などの他産地に下請けに出し、京都では寺院用仏壇と在家用高級仏壇の製造に特化した[24]。時代によって動向は異なるが、彦根、広島、八女福島、川辺などの仏壇産地が京型仏壇普及品産地としての機能を担ってきた。特に川辺仏壇は産地独自のガンマ型仏壇などを製造する一方で、京都などの他産地の OEM (Original Equipment Manufacturing) 製造の体制を構築している。そのため、川辺町で生産されている仏壇は主に「京型仏壇」と言われる[26]。

京都府仏具協同組合の商部⁽⁸⁾のうち五十七軒を調査対象とした昭和 35 年 11 月から昭和 36 年 10 月までの 1 年間の販売額の内訳は、寺院用金属製品が 27.0%、寺院用木製品が 20.6%、家庭用仏壇が 27.5%、家庭用付属仏具が 21.5%、念珠・その他の仏具が 3.4% である[18]。京都では旧来寺院用仏壇・仏具の販売が主であったが、昭和中期には在家用仏壇・仏具の売れ行きが好調となっている。しかし、高級品生産に偏した京都の在家用仏壇・仏具の売り上げは、後に他産地の量産化に特化したいわゆる“ルールもの”に押されるようになった[18]。つまり、京仏壇と京型仏壇のブランド差別化戦略の展開を通じて、京都は仏壇産地としての特異的な立ち位置を構築した反面、「京」の名が付く仏壇の大衆化と混沌化を促進する結果となったことが指摘できる。

4. 近年の京仏壇・京仏具の社会的受容

『3. 京仏壇・京仏具の歴史的変遷』では、昭和中期までの京仏壇・京仏具の社会的受容について整理した。ここからは近年の京仏壇・京仏具の社会的受容を明らかにするために、令和 3 年 (2021) 12 月から令和 5 年 (2023) 9 月にかけて京都府仏具協同組合に所属する二名に対して行なったインタビュー結果をもとに論じる。

調査対象者 A は江戸時代後期創業以来、主に東西両本願寺をはじめとした浄土真宗系統の寺院内装や仏壇・仏具販売を手掛けている会社に所属するキャリア 50 年以上の男性とした。対象者 B は仏壇・仏具製造 (蒔絵彩色部門) の

職人であり、キャリア 40 年以上の男性とした。対象者たちには事前に研究内容を説明し、同意を得た上で期間中に複数回のインタビュー調査を行なった。

京都府仏具協同組合は上述の「商部」と、製造に関わる生産者や加工業者などからなる「工部」によって構成される。工部には木地、屋根、彫刻、漆塗、蠟色、箔押、蒔絵、彩色、鍔金具などの職人が所属している。インタビュー調査の対象者 A は商部、対象者 B は工部に所属している。対象者 A と B のそれぞれに対して、[①産地の特徴] [②受容の変化] [③意匠の変化]の 3 つの項目に従い、半構造化面接法を用いてインタビューを実施した。インタビュー内容は対象者の同意を得た上で IC レコーダーにて録音した。録音した内容は全てテキスト化し、対象者の同意が得られた部分を分析対象とした。

[①産地の特徴]

宗派によって仏壇・仏具の意匠に差異が見られることは先にも述べた通りである。対象者 A が所属する会社が手掛けている浄土真宗を例に挙げると、西本願寺（浄土真宗本願寺派）と東本願寺（真宗大谷派）の仏壇では、金の使用法や荘厳加飾などに違いが見られる。対象者 A はこの点について「東本願寺を建てる時に、これはしてはいけないということを約束させられて独立してはるんです。金をたくさん使ってはいけない。彫刻に色を付けてはいけないなど。当時の仏壇屋さんとお寺さん、職さんが偉かったのは、西本願寺のあの厳かな金ピカの道具に対抗できるだけのお宮殿をはじめ仏具をつくらあった」と述べている。

対象者 A は唐木仏壇について「東京は関東大震災などもあって、漆を塗って金を押す技術者もそれほど育たなかった。やっぱり京都の技術というか、京都の工芸が日本の主要産業でしたからね。そういう意味で東京は金仏壇よりも紫檀、黒檀を加工する唐木仏壇というのが主流になっていた」と述べている。現在、唐木仏壇の産地としては徳島や静岡が名を馳せている。京仏壇は金仏壇を主とするが、京都府仏具協同組合にも唐木仏壇の職人が所属して

いる。この点は各宗派の寺院や檀家の集約地であり、それぞれの求めに応じた仏壇・仏具の提供が必要とされる京都という産地の特有の生産構造と考えられる。

『3. 京仏壇・京仏具の歴史の変遷』にて先述したように、明治中期以降の京仏壇の在家用仏壇は、京都で製造される高級仏壇と他産地で製造される京型仏壇への分化が進んだ。さらに、昭和中期以降に京都府の主導によってデザイナーと協働した新型仏壇（現代仏壇）の製造が検討され始めたとのことである。協議の結果、京都府仏具協同組合の中から対象者 A が所属する会社を含む二社が新型仏壇の製造に着手したことが、京仏壇における新型仏壇製造の始まりとなった。開発当初の新型仏壇は伝統的な寺院の在り方や本山の形式などを精査した上で設計されたものであり、その設計に基づいて京仏壇の職人が京仏壇の技術・技法を用いて製造にあたった。当初の新型仏壇の売れ行きはあまり良くなかったが、その後幾度も改良を重ねて、現在では新型仏壇が主力製品となっているとのことである。

〔②受容の変化〕

対象者 A が「京仏壇のジャンルの中での完成品」と述べる新型仏壇とは別に、昭和後期頃から家具製造業者などが仏壇業界に新しく参入して家具調仏壇を製造するようになった。さらに、元来唐木仏壇を扱っていた業者も家具調仏壇の製造に着手し始めたことにより、伝統的な仏壇産地を巻き込んで仏壇製造の多様化・複雑化が進んだ。一方、伝統的な仏壇産地においても従来の枠組みを超えた新たな取り組みが始められた。例えば、川辺仏壇では鹿児島県工業技術センターと協働し、製造工程の作業省力化技術開発や川辺仏壇製造技術を活用した新商品の開発を進めている[24,26-28]。彦根仏壇では2004年以降に創作仏壇の開発プロジェクトが始まり、学生と彦根仏壇事業協同組合との連携事業が進められた。また、滋賀県内のデザイナー団体と協働し、彦根仏壇の技術を活用した新商品開発なども行なっている[29,30]。

仏壇業界全体の変化に加えて、世間一般の宗教観やライフスタイルなどの変化が進んだ結果、京都においても伝統的な金仏壇に関心を示す人の数は減少の一途を辿った。対象者 B は「以前は仏壇の仕事がたくさんあったが、近年は年に数える程度になった」と述べている。また、家具調仏壇を求めて京仏壇・京仏具の販売店を訪れる人も増加しており、対象者 A はこの変化について、「買いに来られるお客さんは「リビングに置く仏壇はどこにある」ということに始まって、店頭金仏壇を置いていたのも全く意味がなくなりました。だから、家具の知識が必要な時代になりました。」と述べている。ここからも世間一般の仏壇に対するイメージが伝統的な金仏壇から家具調仏壇に移行していることが分かる。

買い手側にとっての商品価値の不明瞭化は購入条件にも大きな影響を与える。伝統的な仏壇であることが仏壇購入の必要条件ではなくなると、買い手自身が納得する見た目や用途を持つこと自体が購入の十分条件になり得る[31]。その中で京仏壇・京仏具の老舗においても、新しい仏壇のかたちの展開や従来の仏壇の概念から離れた「祈りの対象物」の開発、市場開拓が進められており[32,33]、今の社会において受け入れられる仏壇・仏具を模索している状態にある。その一方で新しいものが求められたとしても、伝統的な京仏壇・京仏具が求められないのであれば、旧来継承されてきた商部と工部それぞれの知見や技能の発揮、継承が困難になるというジレンマも生じている。この問題に対して、京都府仏具協同組合では職人の後進育成や職人間の技能研修（分業制の中で自分が担当する工程以外の工程の実技を学ぶ研修）、伝統的な仏壇・仏具の工程を解説できる人材の育成などを推進している。

人材育成の一例として、同組合には「京仏ソムリエ」という認定制度がある。京仏ソムリエとは京仏壇・京仏具について特に深い専門知識と経験を有する組合員を登録認定する制度である。対象者 A も京仏ソムリエの資格を取得しているが、対象者 A は「それ（知識）を解説する場所がない。金仏壇に見向きもしはらへんのですね」と述べており、仏壇購入者の関心の推移により、伝

統的な仏壇・仏具の解説が求められる機会自体が減少していることを指摘していた。また、対象者 A は商部の立場から買い手側の要求と職人の技能向上や後進育成との間に生じている不均衡を現状の課題として挙げていた。

〔③意匠の変化〕

一般に、金仏壇の在家用仏壇の形状は本山寺院のミニチュアと言われる。この点について対象者 A は、旧来は仏壇商が遠慮して「本山通りに仏壇をつくってはいけない」という考えを持っていた時代もあったが、「ある仏壇屋さんが本山通りですって言い出して、そうしたら本山通りにして欲しいですよ。だから、いろんな変遷があって、本山のお膝元に居る仏壇屋が本山通りのミニチュアをつくっていますっていうのが、一時期売りになっていた」と述べている。そのため、伝統的な京仏壇の意匠に特に宗派ごとの違いが顕著に見られるのは、この本山通りの意匠が踏襲された結果だと考えられる。

一方、仏壇・仏具ともに簡素化や小型化が進む中で、京仏壇の新型仏壇においても木彫刻や蒔絵彩色、鋳金具などの装飾的な工程の簡素化や省略化も見られる。対象者 B は「京都の場合は誂えを専門にやってきたと考えるのが良いのかな。うちの仕事の中にはそういうものも未だにあるということと、従来型の修理や修復もあります」と述べる一方で「簡便化・簡略化されている中では、加飾の部分を担っている蒔絵の仕事自体はなくなったりしている可能性が非常に高いし、須弥壇のところにはわざわざ蒔絵を入れるのみになっていることも多々あります」とも述べている。このように、売り手側の工夫や多様化と、現代の生活に応じた仏壇・仏具を求める買い手側の多様化とが相俟って、つくり手である技能者に求められる技能にも変化が生じている。

さらに、対象者 B は「それ（伝統的な京仏壇）に対して供与してきた技術というものがなくなっている部分があるので、デザインにおいても技術においても継承がしにくい状態になっていると考えられます」と述べている。対象者 B の発言から、従来の仕事の内容や量とは異なるにしても、伝

統的な仏壇関係の仕事が今も求められていることが示された。しかし、後進育成の観点からは、過去に伝統的な仏壇の仕事に携わった経験がない人に対して如何にして伝統的な意匠や技術を継承していくのかという課題に直面していることも示唆された。ゆえに、先に[②受容の変化]で述べた「旧来発揮されてきた技能の維持」と「今求められている技能」の差異が後進育成の隔たりとなっていることが指摘できる。

伝統的な仏壇・仏具は元来本尊を荘厳するための役割を持ち、その役割を果たすための意匠を持つが、その意味を知る人も徐々に減少してきている。現に仏壇の簡素化の進行や仏壇に位牌のみを置く人が増加していることから、元来の仏壇ではなく、祖先祭祀のための位牌壇としての性格の強まりが伺える[33]。さらに、対象者Aは「(以前は) もう何となく仏具やって分かるものが当たり前やったでしょう。最近はこれ仏具って呼ぶのかっていう」と述べており、伝統的に使用されてきた材料以外でつくられた仏具の存在についても言及していた。仮に伝統的な仏壇産地が伝統的な材料以外を使用して仏具を制作するのであれば、伝統的工芸品の指定要件や従来の分業制の供給体制を超えた対応が求められることになる。

5. 総合考察

上記のインタビュー内容を整理すると、京仏壇・京仏具産地の近年の動向として、明治時代以降のブランド差別化戦略に加えて、昭和中期頃から新型仏壇の製造が始まった。当初新型仏壇の売れ行きはあまり良くなかったが、その後幾度もの改良を重ねて、現代では新型仏壇が京仏壇の主力製品となっている。従来の京仏壇の新型仏壇は伝統的な京仏壇の形式や技術の流れを汲むものであり、昭和後期以降に仏壇製造に新規参入した業者が製造する家具調仏壇とは異なる性質のものと言える。しかし、近年は京仏壇・京仏具の販売店にも家具調仏壇を求めて訪れる人が増加し、金仏壇への関心が低下していることから、総じて世間一般の仏壇に対する概念自体が変化していること

が推察される。

変わりゆく仏壇・仏具産業の中で、技能研修や京仏ソムリエ制度の事例に見られるように、京都府仏具協同組合も技能継承や後進育成事業に取り組んでいる。その反面、伝統的な技能を身に付けた職人がその技能を発揮する場は明確に変質している。特に従来の分業制の在り方に関しては大きな転換期を迎えており、社会的受容とつくり手側の実態に乖離が生じていることが指摘できる。職人を志す若手の存在に対しても、雇用形態と技能習得などを考慮した受け入れ体制が十分に構築できていない状態にある[34]。産業的観点から見ると、現代の受容に即した技能を持った職人を育成し、新たな局面に対応するという方法論も考えられる。しかし、工芸の集約地であり、各宗派の本山が集う京都における仏壇・仏具産業の変質は、手仕事や美術工芸のみならず、宗教活動や宗教文化にも影響を及ぼすことにも十分に留意する必要がある。さらに、過去につくられたものの維持、修復などにも視野を広げると、安易な判断は文化の破壊や放棄にも繋がりがかねない。

社会的受容の変化に伴い、もの本来が有する意味や意匠、そして職人の技能にも変化が生じることは何も仏壇・仏具に限ったことではない。仏教関連のものづくりに関して言えば、石灯籠もまた社会的受容に応じて大きな変化を遂げている。そもそも伝来当初の石灯籠は仏前に神聖な火を灯すための役割を担っていた。しかし、石灯籠は後に茶の文化と結び付き、庭の添景物としての役割を取得した[35]。また、切支丹灯籠のように隠れキリシタンの信仰に供する石灯籠もつくられた[36]。そして、江戸時代には石灯籠の大衆化も進み、名物灯籠の写しも多くつくられた[35]。一方、大衆への普及によって多くの石灯籠が求められたことを背景に粗製乱造も引き起こされた[37]。平成30年(2018)の大阪北部地震に際に石清水八幡宮(京都府八幡市)で倒壊した石灯籠は江戸期以降につくられたものであり、それ以前のものは無傷であった。⁽⁹⁾ 外側からは見えないほぞ(接合部分)のつくりなど、石灯籠の本質的な機能を担う部分が簡素化された結果とすることができる。

石灯籠の例にしても仏壇の例にしても、古来職人の技能は実用品に限らず、各時代を生きた人々の願いを具現化する上で発揮されてきた。宗教観や死生観などの精神的な変化や、仏壇・仏具の簡略化、家具調化などの物質的な変化はあるにせよ、各時代において求められ続けてきたからこそ、今も仏壇・仏具は存在し続けている。社会的受容の変化に対応する可変性を持ちつつも、天然資源を活用した手仕事という本質を変えずに世代を超えて継承されてきたことが伝統工芸を伝統工芸たらしめる理由でもある。しかし、従来の生産体制の窮状や異業種との競合を視野に入れた時、伝統的な仏壇・仏具産業の構造に変革が求められていることもまた事実である。多くの手仕事が機械に代替され、人工知能の発達も著しい昨今において、伝統工芸の継承とは本質の維持を意味するのか、あるいは本質と実態の乖離を意味するのか、今後の動向に引き続き着目する必要がある。

6. おわりに

本稿では京仏壇・京仏具の社会的受容とその実態について検討するために、まず日本の仏壇の起源と在家用仏壇の成立過程、そして仏教伝来以降から昭和中期までの京仏壇・京仏具の歴史の変遷について先行研究をもとに系統的に整理した。その後、現役の京仏壇・京仏具の製造販売者と職人に対して[①産地の特徴][②受容の変化][③意匠の変化]の3つの観点からインタビュー調査を行ない、その結果を分析した。

本稿において論じたのは、京仏壇・京仏具に限られた事例であり、本結果が同産業の全てに反映されるものではない。また、本稿は在家用仏壇を中心に論を展開したため、京仏壇・京仏具において大きな比重を占める寺院用仏壇・仏具についての十分な調査や言及はなされていない。そのため、在家用仏壇に関する他の事例や寺院用仏壇・仏具を含めて今後も継続的に研究を続けていく必要がある。

伝統工芸の多くはその歴史の長さに対して、明文化された情報が少ないた

め、職人間の継承や社会への発信、共有においては根本的な課題を抱えている。室町時代から江戸時代初期にかけて一世を風靡した辻が花染の技法が途絶したように、どれだけ世に求められたものであっても、誰かが残すための取り組みをしなければ、時代の流れの中で消滅してしまう。ものづくりの進化と淘汰の歴史の中で、産業としての持続的な在り方の構築はもとより、従来継承されてきた仏壇・仏具の意匠や技術の意義、そして文化財の維持や修復などの将来を見据えた俯瞰的な取り組みが求められる。そのため、今後は「現状として求められる仏壇・仏具」と「旧来の分業制に基づいた伝統的な手仕事」との乖離が職人の意識や京仏壇・京仏具の継承に与える影響についても引き続き調査を行なう必要がある。

※本稿は日本応用心理学会第 88 回大会 (2022 年) において発表した「京仏壇・京仏具の社会的受容と職人の技能継承に関する研究」を加筆、修正したものである。

成田智恵子、京仏壇・京仏具の社会的受容と職人の技能継承に関する研究、日本応用心理学会第 88 回大会発表論文集、13、2023。

謝辞

インタビューにご協力いただきましたお二方に深謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 21K12888 の助成を受けたものです。

注釈

- (1) 例文 仏教語大辞典、ジャパナレッジ、<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=54100P248230>, (参照 2023-11-17 参照)
- (2) 例文 仏教語大辞典、ジャパナレッジ、<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=54100P246970>, (参照 2023-11-17 参照)
- (3) 国立国会図書館、日本書紀 30 卷 [14]、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/2563111>, (参照 2023-11-17 参照)
- (4) 昭和 49 年 (1974) 5 月 25 日に公布された「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」

に基づき、経済産業大臣によって指定を受けた工芸品を指す。

- (5) 国が指定した伝統的工芸品 241 品目 (2023 年 10 月 26 日時点)、伝統工芸品、経済産業省、https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/nichiyu-densan/index.html, (2023-11-17 参照)
- (6) 国文学研究資料館、京羽二重大全、国書データベース、<https://doi.org/10.20730/100241151>, (2023-10-21 参照)
- (7) 国文学研究資料館、京都買物獨案内、国書データベース、<https://doi.org/10.20730/100160627>, (2023-10-21 参照)
- (8) 商部は主に製造卸や製造小売、販売業者などを担う。
- (9) 京都の文化財に被害 石灯籠 4 基倒壊の石清水八幡宮、古くからあるものは無傷、産経 WEST、産経新聞社、2018-6-19, <https://www.sankei.com/article/20180619-6647VYSRLNNBLLQ2LYA4WJU7XY/>, (2023-10-21 参照)

参考文献

1. 浅見薫、明日への伝統工芸：心豊かな物づくりに向けて、京都伝統工芸産業支援センター、2005。
2. 並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代（編）、京都 伝統工芸の近代、思文閣出版、2012。
3. 成田智恵子、定性的・定量的手法を用いた伝統工芸における社会・産業的実態の解明：京蔦絵を対象として、京都工芸繊維大学博士論文、2016。
4. 井口富夫・李复屏、京仏壇・仏具業の経営実態調査結果の概要、龍谷大学経済学論集、43 (4), 71-78, 2004。
5. 財団法人伝統的工芸品産業振興協会、平成 15 年度伝統的工芸品産地調査・診断事業報告書 産地特別調査診断—仏壇—、2004。
6. 竹田聽洲、仏壇の成立する民俗学的論理—常民の家と祖霊と仏教との関係—、禅学研究、(44), 7-30, 1953。
7. 柳田国男、先祖の話、角川学芸出版、2013。
8. ヨルン・ボクホベン、葬儀と仏壇—先祖祭祀の民俗学的研究、岩田書院、2005。
9. 蒲池勢至、オソーブツと真宗仏壇の成立、同朋仏教、(27), 45-75, 1992。
10. 須藤寛人、仏壇・位牌信仰の史的考察、駒澤大学佛教学部論集、29, 329-345, 1998。
11. 柳宗理・渋谷貞・内堀繁生（編）、木竹工芸の事典、朝倉書店、2005。
12. 大河直躬、住まいの人類学 日本庶民住居再考、平凡社、1986。
13. 鎌倉新書編集部（編）、どこが違うの？お仏壇、鎌倉新書、2000。
14. 山形市史編集委員会、山形市史資料 山形佛壇関係史料：星野家文書、1980。
15. 田中寿雄（編）、日本の伝統仏壇集、松栄出版、1977。
16. 内田秀雄、三河における仏壇工芸—風土地理学論的考察—、奈良大学紀要、(6),

- 15-27, 1977.
17. 岡崎譲治、仏具大辞典、鎌倉新書、2000.
 18. 京都市商工局編、京都の伝統産業：その構造と実態、京都市商工局、1962.
 19. 前田育徳会尊経閣文庫（編）、尊経閣善本影印集成 新猿楽記、八木書店、2010.
 20. 高橋貢・増古和子、宇治拾遺物語 上 全訳注、講談社、2018.
 21. 佐藤隆研・奈良本辰也・吉田光邦ほか（編）、京都大事典、淡交社、1984.
 22. 中江勁、現代の仏壇仏具工芸：信仰構造の変革と仏壇業界の展望、鎌倉新書、1977.
 23. 若月正吾、江戸時代における幕府の宗教政策とその背景、駒澤大学仏教学部研究紀要、(29), 32-45, 1971.
 24. 荒木國臣、日本仏壇工芸産業の研究、赤磐出版、2005.
 25. 京都府仏具協同組合、創立五十周年記念「永遠の匠」、1998.
 26. 藤田純一・恵原要、新しい仏壇デザインの開発、鹿児島県工業技術センター研究成果発表会予稿集、21, 2007.
 27. 藤田純一・山田淳人・恵原要・中村寿一、仏壇の小型精密化に関する研究、鹿児島県工業技術センター研究成果発表会予稿集、4-5, 2012.
 28. 恵原要・中村寿一・山田淳人・寺尾剛・澤崎ひとみ、川辺仏壇製造技術を活かした新商品のデザイン開発研究および試作、鹿児島県工業技術センター研究成果発表会予稿集、2004.
 29. 大橋松貴、伝統産業の製品開発戦略 - 滋賀県彦根市井上仏壇店の事例研究、サンライズ出版、2019.
 30. 大橋松貴、伝統技術による現代的価値創造 滋賀県彦根市 井上仏壇の製品開発戦略、サンライズ出版、2022.
 31. 成田智恵子・下出祐太郎・来田宣幸、京都の蒔絵工房における持続可能なものづくりの在り方に関する事例研究 — 伝統工芸士へのインタビューを通じて —、文化経済学、12 (2), 22-37, 2015.
 32. 鎌倉新書、月刊終活 2023 年 3 月号、仏壇特集 2030 年に創業 200 周年を迎え思い描くビジョンと果たすべきミッション、270, 46-49, 2023.
 33. 辻田素子（編）、長寿ファミリー企業のアントレプレナーシップと地域社会：時代を超える京都ブランド、新評論、2023.
 34. 成田智恵子・下出祐太郎・西村眞仁・西川博之・吉岡尚美・小西歩・西村純一、伝統工芸の持続可能な未来へのチャレンジ デザイン心理学とキャリア心理学の視点から、応用心理学研究、48 (3), 196-206, 2023.
 35. 西村金造・西村大造・西村光弘、京石工芸石大工の手仕事：西村石灯呂店作品集 1995-2006、現代書林、2007.
 36. 宮下良明、切支丹燈籠と佐伯潮谷寺、佐伯史談、160, 21-25, 1992.

37. 下出祐太郎・成田智恵子・下出茉莉、京の美の継承、京都新聞出版センター、2021.

